

歴史の変化に呼応した美術 その2 デュシャンとピカソ

現代美術の始まりは、1917年のニューヨーク・アンデパンダン展に臨んだ、デュシャンのある作品が契機とされています。

このことは、余りにも有名な話なので、皆さんもよくご存知だと思います。その『泉』と題された作品は、既成の男子用小便器に R.Mutt とサインしたもので、デュシャンは匿名で出展しましたが審査で出品を却下されています。

“レディ・メイド（本来の意味は「既成品」：デュシャンは従来の考え方、芸術作品とは人の手による一点もの、という考えを否定した）”と呼ばれる手法ですが、コンセプチュアル・アート（Conceptual art は、1960年代から1970年代にかけて世界的に行われた前衛芸術運動、日本では概念芸術と訳された）の祖になる考え方でもあります。



マルセル・デュシャン



『泉』

この現代美術の起源についても解釈の幅がありますが、私はデュシャン以降が現代美術であるという考えを指示します。ポイントは時世の変化です。

何故ならば、1917年はヨーロッパの君主制を崩壊に導く、世界を巻き込んだ「第一次世界大戦」の終期。3月にロシア革命が勃発し、その後アメリカ合衆国と中国が第一次世界大戦に参戦した激動の時代です。参戦した各国とも、莫大な国家財産と資産を失った近代戦争でした。

そのような社会状況のなかで、デュシャンが何を思い、何を訴えたかったのか。デュシャンは第一次戦争最中の1915年にフランスからアメリカに渡米し、アメリカを足場に以降両国で活動します（後にチェスに興じ「芸術家を捨てた芸術家」といわれたデュシャン個人の業績は他

に譲ります)。

晩年「観念としての芸術」という考えを示したデュシャンですが、個人的に気になることは、デュシャンは旧ヨーロッパの象徴ともいえるフランスで育ち共和主義による国民統合が成された時期に、まだ建国浅いアメリカでアメリカンデモクラシーの思想に触れました。当時において、彼は言い知れぬ同時代に存在した次元の壁のような差異（資本家と労働者、専制政治と個人主義など）を強く感じたのではないかと、ということです。この体験がレディ・メイドという逆説的な手法と『泉』という作品を導いたと思われてなりません。

時代背景として興味深いことは、この年の11月、今日のパレスチナ問題の遠因とも言われている宣言、“バルフォア宣言(パレスチナにおけるユダヤ人国家建設を約束することに同意した)”をイギリスが発表しています。まさに激動の最中における新たな変化への兆し、その象徴が『泉』であると言ってもよいのではないのでしょうか。

『泉』騒動から2年後の1919年、日本は列強の植民地支配が続き人種差別の厳しい世界の中で、アメリカやカナダで問題となった日系移民排斥問題を重視し、国連で初めて人種差別撤廃を提起しています……。『泉』は新しい時代を予言すると共に、既存社会の愚行を心配していたのではないのでしょうか。

都市無差別攻撃の悲劇が産んだ、歴史的反戦芸術



ピカソ ギェルニカ 1937年

そして、『泉』から少し時代を経た 1937 年、ピカソにより『ゲルニカ』が描かれました。これも歴史の変化に呼応したという点で、外せない重要な作品のひとつです。

『ゲルニカ』が描かれた 1937 年頃のスペインは、左派の社会主義と右派の保守勢力が激しく対立していた時代でありました。スペイン内戦はその左派（ソ連が支援）と右派（ドイツが支援）が対立した結果だったのです。

スペインは第一次世界大戦後、王制に対する民衆の不満が高まります。王制打倒を目指す共和派（左派）が民衆に支持され躍進すると、国王アルフォンソ 13 世は退位を余儀なくされ 1931 年に無血革命を達成し、共和制へ移行しました。

やがて、社会主義政党「スペイン人民戦線」が政権を握りますが、政治的混乱や治安の悪化が収まりませんでした。1936 年 7 月、右派の指導者カルボ・ソテロが暗殺されると、これを契機にスペイン国内の保守派は結束を固めます。この動きに呼応し、フランシスコ・フランコ将軍がクーデターを起すと、軍部やカトリック勢力などの保守派が次々とこれに応じ、社会主義政府に対して大規模な反乱を起こしました。ここにスペイン内戦が、勃発します。

社会主義政府はソ連が支持、フランコを中心とした右派の反乱軍をドイツ・イタリア・ポルトガルが支援し、イギリスは中立の立場をとりました。

では、なぜゲルニカが狙われ無差別爆撃を受けたのでしょうか？

スペイン北部バスク地方は、当時自立した地域でした。しかし、ゲルニカには通信施設などの軍事的な重要設備があり、交通の要でもあったのです。従って、バスク地方の都市ゲルニカは、共和国軍の連絡・移動・補給を断つ上で極めて戦略的価値の高い拠点として、ドイツ軍による空爆のターゲットになったのです。

当時ピカソは、パリを活動の拠点としていましたので、このゲルニカ空爆のニュースをおそらくタイムズの朝刊で知ったのではないかと思います。この作品が描かれた理由づけとして、ピカソは共和派支持者だったので、この空爆が『ゲルニカ』制作を導いた“政治的動機”とも言われています。そして、バスク地方の都市ゲルニカは、バスク自治地域中立の象徴として広く知られた地域でした。ここに軍事的な理由で、無差別攻撃を仕掛けたわけですから、このニュースに多くの人々が大変なショックを受けたことも事実です。

バスク地方の建物は木造が多く、この地域を爆撃機による絨毯爆撃、その後戦闘機による機銃掃射、そして焼夷弾を用いた三波にわたる執拗な攻撃が行われました。特に焼夷弾は、2000度-3000度で燃焼するため消火は不可能でした。住居の7割、商業施設の10割が破壊され、多くの民間人が巻き込まれた、歴史的無差別攻撃だったのです。

ピカソはゲルニカ空爆のニュース後、約2ヶ月後に大作『ゲルニカ(349cm×777cm、キャンバス)』を仕上げています。早く仕上げるためか、油絵具ではなくペンキを用いて描かれています。この制作過程はのちに発見された下絵などから知ることができます。そしてこの作品は、1937年のパリ万博スペイン館に展示するため、共和国政府から依頼されたものでした。

しかし、「ピカソは当初全く違う作品を予定していたが、ピカソ自身の身の潔白（共和国に対する）のために描いたのではないか」とも言われており、その真相はベールに包まれ分かっていません。

いずれにしても、近代戦争が引き起こした蛮行を戒め、してはならない非道を広く示し、世界に平和を訴えた「金字塔的、反戦芸術作品」であることは確かです。

*画像は、ウィキペディアなどの公開サイトより